

夫の「発明」に笑顔戻る

固定器具使い片手で刺しゅう



夫手製の固定器具を使って刺しゅうを楽しむアサエさん（ニューライフあじすで）

山口市阿知須寺河内の老人保健施設ニューライフあじす（芳原達也施設長）の通所リハビリテーションを利用している女性が、右半身が不自由になったために諦めていた趣味の刺しゅうを再開。固定器具を手作りした夫の応援やスタッフの協力もあって、笑顔を取り戻した。他の入所者たちも、1針ごとに自信を付け、活気にあふれている。

趣味に生き生き、安光さん

ニューライフあじすの仲間と励む

女性は安光アサエさん（73）。59歳のときに脳血管性疾患で右半身が動かせなくなり、家でも横になってテレビを見ていることが増えた。好きだった刺しゅうで活動量を高めるため、ケアマネジャーと作業療法士からの勧めで、3年前に再開。机と椅子の肘置きに刺しゅう枠をまたがせて養生テープで固定し、刺し子の小物を作り始めた。

家でも苦勞しながら作業をする様子を見た夫の康陽さん（73）が固定器具の作製を思い立った。

「1973年に江良の共同墓地の一角に被爆兵士の遺体が埋められていることが分かり、同年の9月3日（こけ屋敷作業を台

遺族ら、平和への願い

原爆死没者追悼、花や折り鶴

26人分の名簿が奉納されている。

爆心地から1・5キロほど離れた場所被爆したという市内大殿の永野和

松林桂月の作品など 多彩なジャンルそろろう

山口井筒屋で小品絵画展

近代から現代までの日中市町の山口井筒屋で開かれ、本画や洋画約80点を集めた小品絵画展が、山口市



三宅さん（山口井筒屋で）

夫の愛情あふれる器具のおかげで作業がはかどり、今では8カ月間でクッションカバーやタペストリーなどの大作を仕上げるまでになった。孫へプレゼントするのが励み。「好きなことをして目標もでき、表情がまったく変わった」と康陽さん。刺しゅうや手芸好きの人は多く、康陽さんはリクエストに応じて固定器具3個を施設に寄贈。入所者たちが刺し子に夢中

の作品が楽しめる。10日まで。

1933年に文化勲章を受章した萩市出身の日本画家、松林桂月（1876～1963年）をはじめ、20人以上の人気作家による小品や軸装作品を展示している。

大和絵の大家として活躍した松岡映丘（1888～1988年）の「平安美人」（3号弱）は、絹に女性の姿を描き、胡粉や白緑、緑青など日本の鉱石を砕いて作った顔料で色付けされている。また、変色や染みが出た掛け軸の仕立て替えの相談も受けている。